

輪になって支えよう研修

— 発達障がい・精神疾患・心身症のある子どもへの支援 —

大阪精神医療センター分教室

1 はじめに

「輪になって支えよう研修」は、平成30年及び令和元年に、刀根山支援学校の地域支援事業として、大阪精神医療センターと共催で、研修会を開催したのが始まりだった。しかし、コロナ禍になり、集合開催での研修は難しくなったことで、その後開催を断念してきた。しかし、令和6年度に、枚方市小中学校の支援学級部会や養護教諭部会に所属する教員との交流をきっかけに、それぞれの部会研修として、分教室を会場に研修会を開催し、そこで医師の講演や分教室紹介をさせていただいた。その結果、参加者から研修会を継続して開催してほしいとの要望があり、今年度、刀根山支援学校主催で研修会を開催することに至った。これは、枚方市の小中学校の教員との交流を深め、地域校の困り感を共有することで、今後の分教室の運営にも大きく寄与するものと考えた。

2 『輪になって支えよう研修』の概要

(1) 日時 令和7年11月28日(金) 14:50～17:00

(2) 目的 発達障がい・精神疾患・心身症のある子どもへの支援について、医療・教育の両面から先進的な取組みを学び、機関連携・チーム支援の充実につなぐ。また、枚方市小中学校の実情や困り感を共有し、今後の地域支援のあり方を考える一助とする。

(3) 場所 大阪府立刀根山支援学校 大阪精神医療センター分教室

(4) 対象 枚方市小中学校の支援学級及び通級担当の教職員

①施設見学 分教室の施設を自由に見学していただき、分教室教員より説明を行った。

②講演「大阪精神医療センターでの専門的治療と教育の融合」

大阪精神医療センター地域連携・外来診療部 副部長 森 麻子 様

森先生から大阪精神医療センターでの外来通院での対応や入院中の病棟での生活やプログラムについての説明があった。特に、専門スタッフによる患者や保護者に対して、近年積極的に実施しているプログラムについて詳しくお話いただいた。また、分教室との連携により成長できた児童の紹介事例の報告もあった。

③座談会

「自立活動・教科で工夫していること、困っていること」をテーマに、6グループに分かれて、分教室の教員も各グループに加わり座談会を行い、活発な意見交換を行った。

3 実践結果

(1) 参加人数

小学校教員13名、中学校教員4名、教育委員会指導主事1名。

(2) アンケート結果

①講演について

講演を通じ、参加者は、大阪精神医療センターの機能や具体的な治療内容について新たな知見を得ることができたようだ。特に驚きを持って受け止めたのは、PCITや療育入院などを通じ、子どもだけでなく「保護者の困難さ」に寄り添う支援が手厚くなされている点

Ⅲ 公開講座

だ。子どもの安定には家庭の安定が不可欠であり、そのために医療と教育が連携して家庭全体を支えることの重要性を痛感したことや、講演内の「汎化」という言葉が印象に残っている方が多かった。支援学校であれ地域の学校であれ、どこにいても一貫した支援が受けられる環境（支援の均一化）こそが、子どもたちの過ごしやすさにつながると感じたようだ。今回の学びを機に、学校現場でも応用可能な医療的視点や具体的な対応策についてさらに理解を深め、実践していきたいとする意見もあり、充実した講演だったと言える。

②分教室の紹介について

今回の分教室紹介と見学では、参加者から「スライドと実際の見学を通して、具体的なイメージを持つことができた」という声が多く寄せられた。特に、少人数で落ち着いた学習環境や掲示物の工夫、そして自立活動「わにタイム」をはじめとする実践内容については、「自分の学校でも取り入れたい」「自立活動をより有意義なものにしたい」といった前向きな感想が聞かれ、明日の指導につながる有意義な機会となった。

③座談会について

本座談会を通じて、参加者は他校の実践や医療・福祉現場の視点に触れ、多角的な学びを得ることができたようだ。特に、具体的な指導法（わにタイム等）の共有や、保護者支援の重要性への気づきは、今後の教育活動に直結する成果となった。また、日頃の悩みや熱い思いを率直に語り合うことで、困り感の共有や解決への方向付けができ、参加者の孤立感の解消とエンパワーメントにつながる有意義な機会となった。

4 考察

今回の研修会では、枚方市の小中学校における支援教育の現状と、医療・教育の連携の重要性が浮き彫りになった。

座談会では、自立活動の具体的な実践例が共有される一方で、複雑化する児童生徒の困り感や、教員のマンパワー不足、家庭の経済的・精神的な課題への対応に苦慮する現場の切実な声が多く上がっていた。特に、保護者の理解を得ることの難しさや、進路を見据えた内申点・成績評価に関する制度的な課題も指摘されていた。また、アンケート結果からは、専門医による講演や分教室を見学したことが、自校の環境整備のヒントになったと高く評価されたと思われる。

各学校が孤立しないよう、外部専門家による定期的な訪問支援や、医療・家庭・学校を繋ぐ連携システムの構築が強く求められているように感じた。今後の「輪になって支えよう研修」が、そのシステムの構築に微力ながらも貢献できればと思う。